

学生の英語力自己認識について

Students' perception of their own English skills

梅田 礼子*

Reiko Umeda

Summary

Students with good skills of English tend to observe their own skills analytically. While those with poor skills of English tend to see themselves just as “I am weak in English” or “English is too difficult a subject for me,” without analyzing the skills and knowledge they’ve acquired. They judge their skills of English top-down, not bottom-up. This “unconscious” perception can affect their attitude toward learning English negatively. Breaking this wrong perception can be one of the ways to lower the psychological barriers those students have toward learning English.

キーワード：無意識、心理的障壁

Keywords：unconscious, psychological barriers

1. はじめに

語学学習において、基礎を固めること、特に文法と語彙の基礎を固めることは大変重要である。大同大学ではこの目的に照らして、特に基礎学習を行う一年生科目でこれまで対策を講じてきた。2005 年には「基礎英語」科目において学年全体で統一のテキストを使用することとし、前年度から外国語教室スタッフで作成した、基礎的な語彙・文法・短い文章の読解を総合的に学習できるテキストを使用した。2008 年には同じスタイルで新たなテキストを作成し、シラバスも統一した。2009 年からはリメディアル制度を開始、2012 年から英語教育改革の名のもとに新カリキュラム開始、1 年の基礎英語文法、基礎英語リーディングは合冊の新規作成テキストを使用し、より徹底して基礎を固めることができるよう制度を整えてきた。また、単語学習も並行して行うことを開始した。

これら制度改革を行ってきたが、学生の英語力が飛躍的に伸びたという結果は出てきていないようである。2010 年、2011 年ごろの一時増えしていた不合格者数が 2014 年には 2009 年以前程度（全体の 2 割程度）に落ち着いたが、2012 年より統一の単語テストを半期に三回行っていて、その点数が 30 点分評価に含まれている。単語テストは範囲が狭く、すべきことも限られており、取り組みやすいためか、平均点が 10 点中ほぼ毎回 9.0 点前後と高い。これを含めての成績評価であるため、2012 年以後は不合格者が落ち着いてきたと言っても樂觀はできない。むしろ、基礎英語文法、基礎英語リーディング自体の得点は下がっている可能性もある¹⁾。

このように、さまざまな対策に関わらず、学生の英語基礎力が、こちらが期待するほど順調に伸びることが見られず、試行錯誤の段階にある。

半期ごとに行う学習到達度評価アンケートの、自習時間の質問の回答を見ると、週当たりの当該科目にか

* 大同大学教養部外国語教室

けた学習時間が「30分未満」が科目にもよるが5～6割を占める。「30分未満」には「0」も含んでおり、分けて聞いていないので詳細は不明だが、語学学習で、週あたり学習時間が最大の30分であったとしても、十分とは言えない。学生にとって、英語を学習するという動機づけがあまりないように見受けられる。

制度や教科書などは整備してきたが、学生自身の態度や考えを変える方策が必要なのではないだろうか。それについて考察する。

2. 学生による自己評価～学習到達度評価アンケートより

学生は自己の英語力をどのように評価しているか、二種類のアンケートから観察する。

2.1 学習到達度評価アンケートより

本学では半期ごとに全科目で行う「学習到達度評価アンケート」という、自己の学習を振り返るアンケートがある。欠席状況やその科目にかけた学習時間を聞く項目と、各科目で定めた学習到達目標に関し、自身の到達度を回答する項目、それに任意で自由記述形式で、到達目標の到達度評価が低い項目、高い項目についてその理由を自己分析する記述欄がある。

この自由記述欄の記入率は高くなく、30～40名程度のクラスで毎回2～6名程度、1年生は「英語基礎文法」や「基礎英語グラマー」を筆者は3クラス担当していて、合計で12～16名程度、多い時で20名程度、である。しかし、学生にとっては、全科目でこのアンケートがあり、毎回しっかり記述するのはやや面倒だと思われる中、わざわざ何か書いているのはよほどコメントしたいことである。軽視すべきでない。この自由記述を観察すると、クラス編成・レベルによって少し興味深い事実が見えてきた。

2005年頃より1年生についてはプレイスメントテストにより習熟度別クラス編成としており、2011年までは完全な輪切り、段階別としていた。そして、当時の主任の判断により、専任はなるべく下位クラスを担当していた。2012年から新主任となり、専任は上位層の引き上げを行うということで、主に上位クラスの担当となった。この、クラスレベルによって、自己分析記述に少し違いが見られる。

2.1.1 上位クラスでの「低い項目」についての理由分析

2012年以降、筆者の担当している1年3クラスは1つが上位クラス、あと2つは中・下位のミックスクラスであるが、成績からは実質的に2つがやや上位・上位クラス、もう1つは下位クラスと呼んでよいレベル

である。上位クラスではbe動詞や動詞の過去形、進行形等の基本事項の復習は学生にとって退屈だが、下位クラスではそうした基礎もまだ固まっていない学生もいる、というくらいの開きがある。上位クラスで「難しい」「英語は元々苦手」など、全面的に否定的な分析をした記述は25年後期に1名、27年前期に4名あったのみである。(27年前期は通常に比べて記述数自体が多く、計22名記述があった。)

上位クラスでの、「到達度評価が低い項目」の理由分析では、全面的に自分の英語力がない、と書くのではなく、理由を分析的に書いているものも多く見られる。

(1) 上位クラス「低い項目」の理由分析記述

・文章の音読や訳が苦手。プリントの文を自分で訳せなかった。

・語句の意味などのストックが少ない。単語テキストで学習したが、まだ意味をだいたいしか理解できていない。

・理解しようと深めればよかった。

・関係代名詞の使い分けが最後まで出来なかった。

自分の努力不足以外の何物でもない。

・時々英語圏特有の言い回しがあり、訳すのが難しかった。

・三人称のSを忘れてたりするのをなくしたい。

・形容詞と補語を時々間違えてしまうことがあったので3にした。

・分詞がしいて言えばあまりできなかった。

・最初の方の授業が簡単だったから。

・高校でやった単語が多かったから[最後二つは学習時間が低いことの原因と思われる]。

このように、全面的に自分は英語ができない、というのではなく、ある文法項目は習得できているが、ある特定の項目がまだ習得できていない、と分けて分析している。

2.1.2 下位クラスでの「低い項目」についての理由分析

これに対し、下位クラスでの「到達度評価が低い項目」についての理由分析では、以下のように全面的な否定コメントが多い。

(2) 下位クラス「低い項目」の理由分析記述

2012年以降の、中・下位ミックスクラス

・極めて低い項目はないが、少し授業スピードが速く、ついて行くことが難しいことがあった。

・ちゃんと理解できていなかったから。

・文法問題が苦手だったので。

・やる気が起きなかった。・自分の学習不足。2名

・英語は苦手だったので、難しかったし、覚えられているか微妙。けど、最初よりは理解できていると思

う。

- ・全くできない自分には難しすぎた。
- ・英語力が低いため、あまり英語を理解することができなかった。

- ・完了形はもともと苦手。

2011年までの完全習熟度別制度での下位クラス

2006年

・英語をやることでいかなる知的興味を引き出そうとするのか分からず、英語はできればやりたくない。

- ・自分の学習不足。2名
- ・元々苦手。 ・単語力不足。
- ・外国語、英語が苦手、能力が低い。3名
- ・英語が好きになれない。

2007年

・英語は元々苦手。8名 特に文法2名 内「大学に入ってやる気になった」1名

- ・難しい。4名 ・学習不足。5名

2008年

・英語は苦手。 ・基礎ができていない。
・復習が足りなかった。3名
・何から覚えていいのかわからなかった。覚え方が分からない。

- ・いろいろと無理。 ・難しい。2名

2009年

・日本人だからか、英語は難しく思われ、そのせいか勉強もはかどらずこのような結果になってしまいました。

- ・中学の時から苦手だった。
- ・英語が苦手なのでこれくらいがよい。

2010年

- ・英語が嫌いだから。
- ・単語の意味が分かっているから訳せない。

2011年

・英語が苦手。5名
・まだしっかりと英語を覚えていないので、文法が似たものがたくさんで理解しきれなかった。

- ・予習復習を全くと言っていいほどしてない。

このように、ほぼ毎年、每期、「英語が苦手」「英語は難しい」「無理」等、自己の英語力、学習能力を全面的に否定するようなコメントが見られる。

2.1.3 上位クラスでの「高い項目」についての理由分析

一方で、到達度評価が高い項目について、その理由をどう分析しているか。上位クラスでは客観的に、自己の基礎力を分析している記述が多い。

(3) 上位クラス「高い項目」の理由分析記述

- ・基礎のところをよくやっていたので{十分理解する

ことができた。/前からできる。/基礎が固められた。}
(類似8名)

・英語の語法は高校でいっぱい習ったからよくできた。(類似2名)

・ある程度の内容はすべて理解している。後は練習のみ。

・英語は元々好き、勉強が苦じゃなかったから。
・分かりやすかった。
・毎回小テストがあったので、内容はだいたい理解できた。

・スライドとメールの二つで復習ができたので、小テストが前期に比べて良かった。

- ・丁寧に教えていただき、助かった。

・英語が苦手でも分かりやすく解説していたから。

一部、授業方法へのコメントと思われるものもあるが、大半が高校までの既習事項、基本なのですでにおよそ理解できている、という理由であった。

それではそのような高校までで学習した基本が固まっていない下位クラスでは、成長の望みが無いのだろうか？前節(2)の「低い項目」の理由分析記述を見ると、かなり諦めている様子が見え、どのような対策をすべきか、指導側も苦慮する状態である。その下位クラスでも、ある程度目標に到達できたケースもあり、その理由分析を見てみよう。

2.1.4 下位クラス「高い項目」の理由分析記述

(4) 下位クラス「高い項目」の理由分析記述

・中高からの知識でできた、基礎的なことだったのである程度できた5名

・苦手だが頑張った、苦手だが分かった場所が多くあった。
・教科書に入る前に基礎の基礎からやったのでわかりやすかった。6名

・最初から教えてくれた、説明が丁寧だった等。

・自信が持てた。

・授業と補習センターで同じことを何度も教えてもらってやっとわかってきた気がする。

・パワーポのデータを送ってもらったおかげで予習や勉強がしやすかった、よく理解できた。

一部、元々の知識で出来た層も下位クラスにもあるが、「基礎からやったので分かりやすかった」というコメントが多い。学年統一テキストが導入されたが、下位クラスではbe動詞や人称代名詞、動詞の形といったかなり入門期の事項でつまづいている学生が多く見受けられたため、入門事項に絞ったプリントを作成し、基礎を徹底学習してからテキストに入った。それにより、2.1.2節(2)の低い項目の理由分析に見られるような、全面的な自己の英語力否定ではなく、この項目は分かったが、この項目はまだ理解できていない、暗

記しきれていない、など整理ができたようである。少しずつでも理解できる項目が増えてくると自信に繋がる。それが学習意欲にも繋がるようで、完全習熟度別の下位クラスを担当していた時は、机間巡視の際に質問が多く出た。授業評価アンケートの教員コメントに「多くの質問が出て丁寧に回答した。これはミックスクラスでは対応できていなかったと思われる」とコメントしている。完全習熟度別制では下位クラスで諦めの気持ちから学習意欲が低下するのではないかと、受講態度が悪くなるのではないかとという懸念から、現在は上位クラスのみ切り分け、中・下位がミックス、という制度になっている。しかし、筆者が数年にわたり下位クラスを担当した経験からは、確かに当初は諦めや拗ねるような態度が出そうであったが、丁寧に説明する、初歩的質問にも丁寧に対応する、ということが続けていると、次第に「この部分は分かってきた」という状況になり、受講態度も良好であった。学科にもよるが、苦手な者同士の連帯感が生じて皆で努力したクラスもあった。というように、マイナス面ばかりではないように感じた。

ただ、期末試験までに暗記・知識の定着が間に合わない学生も多く、基礎徹底学習をしたからといって即多くが優秀な成績で合格、とは行かなかった。が、不合格の学生が「今までは何が分からないかも分からなかったが、今期でそれがだいぶ分かってきた。再履修では合格出来る気がする」と感想を伝えてくれたこともあった。各自の理解度に応じて丁寧に指導できるのはやはりメリットである。

3. 学生による自己評価～授業外学習補助システムについてのアンケートより

2013年度より授業外学習の促進手段として、授業で使ったパワーポイントファイルをクラウドストレージに保管して提供することを開始、2015年からは授業で学習した文法事項や単語の解説、辞書の利用法、勉強法、文化にまつわる話などをブログに記載して提供している。

3.1 ブログ等利用に関するアンケートより

これらの利用状況について、2015年（平成27年度）前期、5月の連休明けに1・2年生にアンケートを取った。4月にこれらサービスについて周知してから日が浅かったためか、利用している学生は各学年とも2名程度であった。

興味深かったのが、改善提案についての質問に、ほとんどが利用していない状況なのに回答してくれたことである。2名を除き利用していないのに、改善アイデ

ィアで「もっと基礎的な解説を載せる」を選んだ学生が1年8.8%、2年7.8%居た。つまり、内容を見てもいないのに、「どうせ自分には難しい・分からない」と決めてかかっている。そのくらい英語＝難しい・嫌い、教員が用意する物＝どうせ難しい、という意識があるのだろう。まずはこの苦手意識を打ち砕くことが必要だ。しかし、「多少楽しい内容を載せてもらっても英語は自習しない」を選んだ学生も少なからずいて（2年生で多く、19.1%）、このハードルを打ち砕くことの困難さを痛感させられる。

4. 苦手意識についての考察

特に英語の基礎力が固まっていない学生に、英語についての苦手意識が強く、例えば文法事項の一部がまだ習得できていない、というような自己分析ではなく、「英語は苦手だ」「自分は語学が不得意だ」「日本人だからか、分からない」というように、全面的に否定する見方をしていることが観察できた。

苦手意識があるから学習しない、という悪循環に陥る学生も多いようである。（基礎英語グラマーの週当たり自習時間は「30分未満」が約6割。「30分未満」には「0」も含まれている。分けて聞いていないので詳細は不明だが。）こうした苦手意識について考察し、対策についても考えたい。

4.1 New unconscious

Leonard Mlodinow (2012)は現代の unconscious の概念は Sigmund Freud によって広まった概念とは異なる、“new unconscious”であると紹介し (pp. 15-16)、この「無意識」が人の行動に与える影響を様々な事例を挙げて述べている。

また、人は自分の行動がそのような「無意識」に多大な影響を受けているとは認めながらも述べている。

(5) Human behavior is the product of an endless stream of perceptions, feelings, and thoughts, at both the conscious and the unconscious levels. The idea that we are not aware of the cause of much of our behavior can be difficult to accept. (Mlodinow, 2012, p.16)

「無意識」が人の行動に多大な影響を与えた、しかし、自覚が無い例として、ある研究を挙げている。警察署長を選ぶのに、候補者の履歴書に street smarts (犯罪のはびこる都会で生きて行くしたたかさを持った) と、高い教育を受けて洗練された候補を、男女それぞれ混ぜておいた。すると、被験者たちは street smart な男性を選ぶときにはこの特性が重要だ、と述べ、

洗練された男性候補の場合は street smart が過大評価されている、としてこの候補を選んだというのである。つまり、明らかにステレオタイプの男性の職である警察署長に、性別に基づいて候補を選んだわけだが、被験者たちには全く自覚が無く、その候補者を選んだ理由を尋ねても誰も性別が決断に影響を与えた、とは答えなかった。

このように、「無意識」が我々の決断や行動に大きな影響を与えている。しかし、それについて自覚はない。

4.2 学生の英語苦手意識

2節・3節で観察した、本学学生の英語苦手意識だが、2節では学習到達度アンケートという場面で、自己の学習を振り返っているのに、自己分析した結果としての苦手意識と思われる。3節では授業外学習促進サービスについてのアンケートなので、そこで「どうせ難しい」などとしている回答は（しかも、それらのサービスを利用していないのに！）無意識に「自分は英語が苦手」と感じているということだ。

しかし、実は我々が客観的に判断していると思いついていないこともある、と Mlodinow (2012) は述べている。

(6) As these studies suggests, the subtlety of our reasoning mechanisms allows us to maintain our illusions of objectivity even while viewing the world through a biased lens. Our decision-making processes bend but don't break our usual rules, and we perceive ourselves as forming judgments in a bottom-up fashion, using data to draw a conclusion, while we are in reality deciding top-down, using our preferred conclusion to shape our analysis of the data. When we apply motivated reasoning to assessments about ourselves, we produce that positive picture of a world in which we are all above average. Mlodinow (2012, pp.213-214)

bottom-up でなく、top-down で判断をしている、という点は 2.1.1 節の上位クラスでの「到達度評価が低い項目の理由」と 2.1.2 節の下位クラスでのその比較にも現れていた。上位クラスでは到達度が低い項目について、「関係代名詞がまだ理解できていない」（その他の項目は理解できた）、というように分析的である。一方で下位クラスではそのように文法項目（テキストでは単元になっている）ごとに自己の理解度を分析するのではなく、とにかく「自分は英語が苦手」と、いわば top-down で分析している。

苦手意識を克服させる一つの突破口として、この点が考えられる。苦手と言っても、理解できている、定着している文法事項もあるはずで、それを確認し、学習し身に付いたことと、まだ理解できていないこと、

暗記できていないこと等に分けてゆく作業をすると、パニック的に「どうせ英語は分からない」「英語は苦手科目」「とにかく無理」という、誤った自己分析から解放されるのではないだろうか。

一点気になるのは、前出（6）にもあるように、また、以下の文にあるように、人には自分は平均より上だと思いたい傾向があるという点だ。

(7) Psychologists call this tendency for inflated self-assessment the “above-average effect,” and they've documented it in contexts ranging from driving ability to managerial skills. Mlodinow (2012, p198)

しかし、下位クラスの学生は 2 節・3 節で観察したとおり、自己の、理解できている項目などを肯定するのではなく、項目に分けることすらせずに「英語は苦手だ」等、自己を否定する分析をしている。これは一般的な傾向と一見矛盾する。だが、「苦手である」と宣言することで、「だからできない」という、いわば自分（あるいは教員）に対する言い訳ができるので、安心してそちらを選ぶのではないだろうか。

6 割の学生が週当たりのその科目の学習時間が「30 分未満」、つまり、学習時間がかなり不足しているということを考え合わせると、学生が言う「苦手」が、精一杯学習したうえで、それでも理解できない、という状態ではなく、苦手だから学習していない、だから苦手なままであることが推測される。

まずは、この「苦手意識」を前述のように、例えば文法項目ごと、単語学習ならジャンルごとなどに分けて分析し、少しでも崩すことがまず重要と考えられる。リーディングやスピーキング、リスニングのスキルは総合的なので、文法や語彙の学習など、項目に分けやすい科目、場面でまず苦手意識を崩していくのが一つの対策のようである。

5. まとめと今後の課題

このように、自己の学習到達度分析というアンケート、授業外学習促進サービスの利用状況アンケートという二種のアンケートから、学生の、自己の英語スキルについての分析・意識を観察した。

英語が得意な学生が、特に文法では項目ごとに自分の得意不得意を認識しているのに比べ、苦手な学生は分割してみることもせず、全体的に「自分英語は苦手」と、いわば top-down 式にとらえてしまっていることが分かった。特に、文法や語彙の学習の場面で、理解できた項目とそうでない項目に分けるなどして、苦手意識を砕くことが肝要であるようだ。

完全習熟度別クラス制で下位クラスを担当していた

時期には時間をかけて説明する、質問に応じる、細かな小テストをし、自信をつけさせる、というケアを行うことが出来た。現在は上位のみ習熟度で切りとり、中・下位はミックスという制度のため、中・下位クラスで授業の進捗について行けない、また、質問したいがしにくいという学生がいる可能性はある。ただ、どちらの制度にもメリット・デメリットはありそうで、今後十分な検討が望まれる。

学生の自己分析に「基礎からやったので分かりやすかった」「授業と補習センターで同じことを何度も教えてもらってやっとわかってきた気がする」というコメントがあったように、躓いているところまで戻って学習することや、反復学習することも効果的である。が、通常の授業の中では、学習予定項目が多いこともあり、なかなか大きく戻っての復習や、反復学習を行いきるのが現状である。学習支援センターやリメディアルとの連携も必要だろう。

授業外学習促進のための課題や、オフィスアワー利用の推奨など、これまでも教員側も工夫してきているが、それに加えて、苦手意識の克服、という課題に教員側もその仕組みを理解して取り組むことが重要なようである。

注

1) これらの取り組みのまとめ、不合格者数データなどは外国語教室同僚小西章典先生が教室会議（2015年3月18日）に提出して下さった資料による。ここに資料提供のお礼を申し上げる。

参考文献

- 1) Leonard Mlodinow (2012) “Subliminal: How your unconscious mind rules your behavior.” Vintage Books
- 2) 梅田 礼子 (2015) 平成 27 年度教育戦略 ICT 大会(公益社団法人私立大学情報教育協会主催、2015 年 9 月 2 日～9 月 4 日)抄録 pp.164-165